アジア研究所所報
ISSN　0385-0838
第 160 号
発行所
亜細亜大学アジア研究所
東京都武蔵野市境 5-24-10
電話 0422 (54) 3111
郵便番号 180-8629

カザフ族の専業牧家の夏
～新疆維吾尔自治区阿勒泰地区

西澤　正樹

今夏、新疆維吾尔自治区北西部の阿勒泰（アルタイ）地区の現地踏査を行った。阿勒泰地区は西にカザフスタン、北はロシア、東にモンゴル国に接する「辺境」地域である。欧州世界からみると「東トルキスタン」の一部として認識され、テュルク系民族の活躍するイスラーム世界である。

大清国・乾隆帝は一七五〇年代に宿敵のジューンガル帝国（ガルダンを盟主とするオイラート系モンゴル族の帝国）を滅ぼし「西域」を治めた。朝貢制度のもとにモンゴル王公ハーン、チベット王公大ラマ、テュルク系ムスリム王公ベク、カザフ系遊牧民スルタンハーンを大清皇帝の下に位置づける支配構造を構築し版図は最大領域に達した。阿勒泰山脈とジューンガル盆地を抱える阿勒泰地区は最後の遊牧騎馬民族の故地なのである。

大清国は北西辺境地域を「西域新疆」あるいは「新疆（都から遠く離れた新たな土地）」とし版図においたが、一八〇〇年代後半にはロシア帝国の南下東進、大英帝国の東進北上のせめぎ合いの地となり、ユーラシアの心臓部で「グレイト・ゲーム」が演じられた。一九一一年に辛亥革命、一七年にロシア革命が起き、三〇年代には大日本帝国の満蒙大陸政策が加わり、内外情勢の大きな変動のなかで蒙古および新疆では既往の統治制度からの独立運動が活発になった。四四～四九年に阿勒泰は伊犁（イリ）、塔城（タルバガタイ）とともに国民党政府からの独立を目指す「三区革命」を展開し第二次東トルキスタン共和国政権を樹立した。

中国共産党は四九年に中華人民共和国を建国し、王震将軍が率いる人民解放軍が新疆に進駐し新疆生産建設兵団となり、五五年に新疆維吾尔自治区を制定した。以後、阿勒泰地区は伊犁哈薩克（イリハザク）自治州の一地区として今日に至る。

バフィックティベク家の夏営地

阿勒泰地区の行政区域面積は約一一・八万平方キロ（日本の東北六県、関東七都県と新

〈目　次〉

○カザフ族の専業牧家の夏
～新疆維吾尔自治区阿勒泰地区……西澤　正樹……(1)
○光復七〇年反日疲労困憊再見明洞譚……前川　惠司……(4)
○書評論文：宮脇淳子『悲しい歴史の国の韓国人』……野副　伸一……(6)
○来料加工廃止後も中国市場・アジア市場を狙う第一電材……藤原　弘……(8)
○台湾の葬儀（上）……岡崎　幸司……(10)
○『アジアの窓』権力を可視化する儀式……遊川　和郎……(12)

潟県を含む東日本とほぼ同じ）に約六十七万人が居住する人口希薄地域である。哈薩克（カザフ）族が約三十五万人（約五二％）を占める。古来、遊牧を生活の手段としてきた哈薩克族は、現在どのような生活をしているのか。専業牧家バフィックティベク氏（四十八歳、以下ベク氏）の夏営地を訪ねた。ベク家は奥さん、新疆財経大学二年次生の長男（二十二歳）、長女（二十歳）、次女（十四歳）の五人家族である。

訪問したベク家の夏営地は舗装された幹線道路から草原、山岳地帯に約八〇キロメートル入った標高約一二〇〇メートルの谷合いにある。渓流の傍らにカザフ式円形テント「キグジィ」三張を建てている。七月一日から九月初旬まで過ごす予定のベク氏の「第一夏営地」である。九月には全ての家財道具を駱駝に積んで牛、馬をつれ、さらに標高が高く牧草が伸びている「第二夏営地」に移動し、十月初旬までの約三ヵ月間を山中で過ごす。

「キグジィ」の床の半分は土間で、朝夕の冷え込みが始まる八月中旬にストーブを置く。燃料は周囲の松の薪で賄える。昨年から電気が使えるようになった。自治区政府の「新疆無電地区電力工程」の無償援助でソーラーシステムが配備され、衛星通信電話も無償提供された。ベク氏の冬季固定住宅がある布尓津県（ブルチン）には、全国から年間六〇万人を超える観光客が集まる「喀納斯（カナス）湖風景名勝区」があり県の財政収入が豊かであるからとのことだ。

写真２　電気がきた「キグジィ」

写真１　ベク家の夏営地

専業牧家の夏の仕事

ベク家は祖先から遊牧を営み、氏の祖父は冲乎尓鎮（チュンクル）の東に広い牧草地と多くの家畜を持つ地域の族長であった。父の代に中華人民共和国が建国され、従来の遊牧社会統治の仕組みは解体され人民公社に吸収されていく。家畜や牧草地の私有制は集団所有や全人民所有となった。

一九七八年の改革開放政策への転換にて牧業地域にもようやく生産責任制が広まり、社会主義市場経済の導入とともに家畜や生産用具の私有財産権が認められるようになった。六八年生まれのベク氏は小学校卒業後、十五歳のときに父が病気で倒れたことから牧業を受け継ぎ、九三年に結婚し牧業を営みながら長男を大学に送りだしている。

現在、ベク家の所有する家畜は、羊約二百頭、雌牛六頭、馬数頭である。羊は馬で四日行程の喀納斯方面にある「上の牧草地」で同じ鎮の人に放牧を委託している。「夏営地」に置いているのは牛と馬だ。牛は乳を採るためキグジィに近い牧草地に放し、夕刻には子牛に授乳するために自ら戻ってくる。子牛に乳を与えたあと、続いて人が搾乳する。一頭から二～四リットルの乳を採れるので、ベク家は夏の間、毎日一〇～二〇数リットルの牛乳を手にする。

乳は夕刻、娘たちが絞る。そして母が昼間、大鍋でゆっくりと煮たて乳脂肪分を分離しバターや生クリームを抽出する。残った清乳は水分を取り除き固形化・乾燥させて各種の硬いチーズにする。バターは乾燥させた羊の胃袋に詰めて保存する。生クリームは毎日大量に飲むミルクティーとなり、また揚げパンなどに付けて食する。牛乳を乳酸発酵させ蒸留して「アラック」というアルコール度数一〇度ほどの乳酒を作ることもある。

写真３　羊の解体

写真４　牛乳の加工

夏の間に肥育してきた羊、牛など約六〇頭を秋に売る。これがベク家の一年間の収入となる。家畜を殖やし肥育するためにはコストがかかる。「冬営地」の固定住宅で飼育するための牧草を刈り取り乾燥させ、その運搬のため大型トラック一台をチャーターするのに一、五〇〇元（約三〇、〇〇〇円）かかる。ベク家が所有する家畜の冬季飼料はトラック六～七台分が必要だ。また、子供たちの学費、日々の生活消費出費がある。

阿勒泰の羊は「大尾羊」という種で、自然の草と山地放牧での適度な運動によって美味しい羊肉として国内ブランドを確立している。「アルタイ・ブランド」の羊肉は北京オリンピックで指定食肉にもなった。かつては尻尾に大量の脂肪を蓄えることが評価されたのだが、近年の健康食生活ブームで都市消費者の動物性脂質離れが進み「大尾羊」の重量当たり価格が下がっているため販売収入は減る傾向にある。

牧業家の定住促進

八月に入ると朝夕は冷え込みコートが必要となり十月初旬には降雪がある。昨年は十月五日に初雪があった。十月から翌年六月までの約九ヵ月間は布尓津県冲乎尓鎮阿克斉村（アクチィ）の「冬営地（固定住宅）」に移る。

かつての哈薩克族牧家は、牧草が豊富な場所に家畜を誘導し、草が乏しくなると別の場所に移動しながらひと夏を過ごした。冬季には、それぞれ分散し山麓の木造固定住宅で春を待った。こうした牧草地を中心とした居住形態では、就学時の児童・生徒や通院が必要な高齢者がいる家庭は中心鎮に部屋を借りることになり、家計の負担が重かった。

政府は街の固定住宅での定住を支援するため、七～八万元／世帯の住宅建設補助金制度を用意し、冲乎尓鎮の牧業世帯の約四〇％（約二〇〇世帯）が固定住宅を持つようになった。また、固定住宅の周辺に水利施設建設を進め牧家の営農支援も行っている。

鎮長によれば、今後、牧業と農業の兼業世帯が増加するとともに、牧業専業世帯は離牧した世帯から牧草地の放牧権と家畜飼育を受託する「共同組合方式」による経営規模拡大に向かうと語る。「世帯牧業」を営むバフィックティベク家は、大学を卒業した長男が受託牧業を含む「牧業事業」経営を担うのであろうか、それとも長男の離牧にともない牧業の委託に向かうのであろうか。哈薩克族の伝統的遊牧社会がさらに変容を遂げていくことは間違いない。

写真５　牧家の大規模定住村（冬営地）

新疆牧畜民の定住化状況については、新疆財経大学のパリーダ・バイムハット氏がアジア研究所所報第一五一号、一五二号で詳しく述べている。

（にしざわ まさき・アジア研究所教授）

光復七〇年反日疲労困憊再見明洞譚

前川惠司

光復七〇年、日韓国交正常化五〇年のこの夏、ソウルで旧知の地方の大学の教授に会った。彼は十年以上、東京で暮らした。これから日韓関係の見通しに話題が及ぶと、

「ドイツとは違うから」と彼が話した。韓国の新聞によく登場する見方だ。で、

「日本とドイツは、どこがどう違うのか」と聞き返すと、

「日本人は、ひどい。ナチスのドイツ人よりひどい。あんたを含めて日本人はそういう人たちだ」と、いきり立ち、

「植民地にして私たちを苦しめたのに、心から謝罪しない。ドイツ人は膝まずいて謝罪している」

と声を震わせて怒り出した。

「ドイツが跪いたのはホロコーストに、だ。戦争や侵略にではない。現にギリシャが戦争の賠償を請求するといったら、一喝して応じなかったではないか。日本は、賠償を様々な形でしている」

と、言い返すと、

「そんなことは加害者の言い分だ。日本人は文化的にレベルが低い」

とさらに激高して、こう続けた。

「日本がドイツのようにすれば、韓国人はそれでおしまいにするのに…。日本人は個人がないから、謝罪もできない」

と、決めつけるのだった。

「ドイツの首相がパリで跪いた写真をあなたは見たことがあるのか。ロンドンで許しをこうたか」

と、尋ねて打ち切ったが、日本と韓国では人付き合いの作法が相当に違うとはいえ、「日本否定」はストレス解消の格好のサンドバックでもあるだ。

その光復節の十五日の午後、明洞を歩くと、日本人観光客は往時の一割ぐらいである気がした。実際の数字はそれほどでないだろうが、十人、十五人と固まって歩く日本人団体ツアーに出会うことはなく、韓国化粧品店の店頭でも、聞こえるのは中国語ばかり。韓国への日本人のうんざりぶりを実感させる光景だった。ひと昔前、韓国人の女性経営者が、

「韓国人は、殴り合っても、いつの間にかまたけろりとして仲直りする。日本人は、一度相手を見限ったら、二度と付き合わない。そこを韓国人は分かっていない」

と口にしていたが、正常化五〇年といっても、そのほぼ半分の歳月にわたって、韓国は慰安婦問題をきっかけに、国際社会で日本を執拗といえるほど貶めようとしてきた。うんざりした日本が「さよなら明洞」となるのは、当然と言えば当然だろう。

その日のソウルの日本大使館前は大荒れだった。韓国の反日団体が、慰安婦像を中心に集まって、「安倍妄言を許すな」と叫んで、安倍晋三首相を模した人形を焼こうとし、顔写真を張ったプラカードを燃やして暴れまくった。日本の外交官OBは、

「光復節に韓国の団体のひとつが大使館前でこんな大騒ぎをしたのは、今年が初めてだろう。何十年も前の時代に戻った感じだ。少数の活動家に振り回される日韓関係とは、一体何なのだ」と、嘆いた。騒ぎが終わると、この団体の大きなトラックがやってきてプラカードなどをしまい始めた。アルミの荷台の両脇がガバッと上に向って開く、その高額の車を持てる、この団体の財力に驚いた。翌日に会った日韓関係にかかわる韓国政界の一人は、

「演説で朴槿恵大統領は、戦後七〇年の安倍首相談話を遺憾と言わなかった。そこを見て欲しい。年内に安倍首相との首脳会談を実現しようとのシグナルです」と楽観的だった。

「日本は韓国が主張するような法的責任は認めないし、また大使館前の慰安婦像が撤去さ

れないのに、妥協はできないという姿勢ですが」と尋ねると、

「韓国の支援団体も、表向きに話していることとは違ってきているようですよ」

と語り、

「韓国としては、国交回復五〇年を冷え切った雰囲気で終えるのは望ましくありません」

と、融和への道筋を予想してくれるのだった。彼は、こうも言った。

「おばあさんたちの経済的な問題は、すでに韓国側で解決している」

日本の支援団体が慰安婦たちを日本の集会に盛んに呼んでいた九〇年代初めは、韓国には公的な生活支援はないも同然だった。現在でも韓国の高齢者で年金を受けている人は二二パーセントしかおらず、大多数の支給額は日本円で計算すると二万五千円未満だが、元慰安婦が受け取る政府の生活支援金は月十万円以上になる。このほか、一時金で四百万円以上が元慰安婦には渡された。年百四十万円を超える医療支援のほかに、地方自治体からの支援金などもあるようだ。

経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）の調査では、韓国の高齢者層の相対的貧困率は一二年で四九・六％。ＯＥＣＤ平均の四倍で加盟国中一位。高齢者の自殺率も高く、日本の五倍弱。そのなかで、元慰安婦のおばあさんが、奨学金や紛争地の子どものために五百万円、一千万円の多額寄付をできるのは、はるかに余裕ある生活だからだろう。そういえば、日本大使館前での水曜集会で見かけるおばあさんの色つやはとてもいい。服もバリッとしたものだ。おばあさんたちの環境は、河野談話のころとは全く違っている。

「歴史は隠そうとしても隠せるものでもなく、生き証人の証言によって生き続ける」と朴槿恵大統領は光復節の演説でも相変わらず日本を責めたが、韓国の大新聞の幹部はこう語った。

「慰安婦問題を解決できるのは、韓国政府ではなくて、韓国挺身隊問題対策協議会（挺対協）でしかない。今生存している元慰安婦のうち何人が挺対協の側にいるかははっきりしないが、韓国政府がどんな解決案をつくっても、挺対協が拒否すれば実現しない」

朴槿恵大統領はどうして、前政権時代にすでにもつれきっていた慰安婦問題解決を政権の中心的課題に掲げたのだろうか。「女性だからだ」と、大統領に近いと言われる韓国政界通の人たちは答えるが、私の知る限り、彼女が慰安婦だった女性をたびたび慰問したとか、挺対協の説得に乗り出したとかを聞いたことがない。女性だからとの答えに迫力を感じないのはだからだ。

この政権の発足時から韓国内では、野田政権が李明博大統領に打診し、断られたとされる、いわゆる「アジア女性基金改訂版」を朴政権が改めて受け入れて解決するとのシナリオが囁かれていた。ひょっとして朴政権は、その線でこの問題は簡単に解決できると踏んで、政権の大看板に掲げ、求心力アップを狙っただけだったかも知れない。

一方で朴槿恵大統領は、一四年年頭の記者会見で、「統一は大当たり」といって、韓国内外を驚かせた。発言の根拠はいまも良く分からない。韓国内では、光復節のころから、「中国にとって統一韓国が無害な存在となる国際環境になれば、米軍に安全保障を全面的に委ねる状況でなくなってもおかしくない」との展望が語られ始めていた。朴大統領は米国の不機嫌を承知のうえで九月、北京での「抗日戦勝七〇年軍事パレード」に参列した。帰途、習近平国家主席との会談で「（南北朝鮮）の平和統一に向け互いに協力しあう方向で意見を交換した」と語り、中韓蜜月、統一ムードを盛り上げている。歴史を見れば、中国が、朝鮮半島の自立に肯定的な時代があったとは思えないのだが。

五・一六軍事クーデター当時、父、朴正熙少将とともに暮らしていたソウル市内の居宅を見にいくと、一角に彼女の少女時代に使われた文房具などが展示されていた。父がもたらした成果への国民的郷愁が彼女を大統領に押し上げた。しかし、その座に彼女が座った時代に、父の時代のような奇跡は起こりようもないのだが、それでも彼女は、父同様の偉業達成の夢から離れられないのではないか。ずうっと父の影を追っている彼女がもたらした韓国の「侮日」、日本の「蔑韓」。ほくそ笑んでいるのは誰だろうか。

（まえかわ　けいじ・ジャーナリスト）

書評論文：宮脇淳子『悲しい歴史の国の韓国人』

野副伸一

日韓関係は今年国交正常化50周年という節目の年を迎え、また安倍首相の「70年談話」が8月14日に発表されたにも拘らず、相変わらずギクシャクした関係が続いている。日韓関係に関心を持つ日本人の多くは、現在の混乱した関係の解消は当分無理だろうとの印象を持っているのではないだろうか。

評者は現在の日韓関係について、今年の前半に『ギクシャクした日韓関係』というテーマで拙文を書いた（『海外事情』2015年5月号・参照）。その中で、「嫌韓本」と呼ばれる本の出版が2014年にブームとなり、実に多くの「日韓関係論」本が出版されたことを指摘した。評者の購入本の数はその後も増え続け、12年から今年5月までの出版分を含めると、合計50冊に達した。その中で14年分は32冊にもなり、全体の64％を占めている。評者はこれらの本を今後出来る限り読んで、優れた本を紹介していきたいと考えている。

今回取り上げる宮脇淳子著『悲しい歴史の国の韓国人』（徳間書店、2014年12月刊）は、その第一号でもある。タイトルは一見して「嫌韓本」に見えるが、本格的な研究書である。ところで評者は本書を手に取るまで、著者について殆ど知らなかった。評者の不勉強を恥ずるしかない。新聞の新刊書出版の広告で何回か「韓流ドラマの歴史考証は好い加減である」と主張する女性研究者がいるのを見て何となく印象に残るものがあったが、その女性が著者だったのである。その後著者の『世界史の中の満州帝国』（PHP研究所）を読む必要が生じ、評者の著者への関心が俄かに高まった。たまたま立ち寄った本屋に本書があったので、早速購入して読んで見たのである。

内容は実に面白かった。俗な言葉で言うと、巻措く能わずであった。評者の個人的体験を言わせて頂くなら、電車の中でこの本を読んでいて、降りる駅を2回も乗り過ごしてしまった位である。

著者の専攻分野はモンゴルなど中国周辺国の歴史である。朝鮮史の専門家でもない著者が何故朝鮮史について本を出版するようになったのか。著者はこの点についてまえがきで、「李氏朝鮮の前の高麗は実はモンゴルの支配下にあったからです。フビライに降った後の歴代の高麗王の母親はずっとモンゴル人でした。そういう基本的な歴史も日本では教えられていないのです」と執筆の動機を語っている。要するに、著者は日本の朝鮮史、韓国史理解に欠陥があると見ていたのだ。

実際モンゴル史の専門家である著者が書いた本書は、後述する各章のタイトルが示すように、極めて刺激的である。朝鮮史専攻の日本人研究者に有りがちな遠慮とは無縁な内容である。本書では古代から最近の反日思想や行動に至るまで広範な韓国の歴史が俎上に載せられており、著者の歯に衣を着せぬ主張は明快である。そのため韓国人からの反発も当然強いようだ。本書でも、具体的なケースとして「李氏朝鮮の太祖李成桂の父はウルスブハという名の女真人であった」（p44）との著者の主張に対し、「韓国から猛烈な批判が来ました」（p45）とある。

以下、本書の各章のタイトルのみを紹介しておきたい。第1章　歴史の主役になったことのない朝鮮半島、第2章　高麗はモンゴル支配の国だった、第3章　李氏朝鮮は停滞の500年であった、第4章　日本がいなければ大韓帝国はなかった、第5章　日露戦争の原因を作ったのも朝鮮だった、第6章　満州事変の背景にも朝鮮人の存在があった、第7章　日本統治がなければ今の韓国の発展はなかった、第8章　南北に分断された朝鮮半島の悲劇、第9章　なぜ韓国人は日本を

目の敵にするのか、以上。

全編を読んでの印象は鮮烈であるが、韓国の政治経済の現状分析を専門にしてきた評者にとって、歴史研究の面白さと重要性をこの本は改めて教えてくれた。本書のポイントは、日本が明治維新でいち早く国民国家の形成を成功させ、それまでの中国を中心とする東アジアの秩序に摩擦と変革の機運を生じさせたという点にある。

その結果の中で、特に注目すべきは、以下の点である。第一に、「韓国人が日本を目の敵にするのは、韓国人をつくったのは日本人だったからである」（ｐ２０～２３）。著者は「日本人が朝鮮半島に行かなかったら、朝鮮史はおそらく成立しなかったでしょう。…日本が韓国を併合するまでは、朝鮮半島の人々には朝鮮人、コリアンという民族意識もありませんでした。…李氏朝鮮は国でもないし、民族でもなかったというのが本当のところです」。朝鮮人のアイデンティティ形成に日本の統治が重要な役割をした、というのが著者の主張である。

これと関連し中国にも触れておきたい。第二に、「中国の屈辱の歴史はアヘン戦争からではなく、日清戦争の敗北からはじまった」（ｐ９３～９５）ことである。著者は「中国人はアヘン戦争から屈辱の近代化が始まったと主張していますが、これは真っ赤なウソです。この歴史観は毛沢東が自分たちの歴史から日本の影響を抹殺するために、支那事変の最中に延安で考えた歴史です。本当は日清戦争に負けたあと、中国の屈辱の近代化が始まります。清朝が変わったのは、日本に負けた衝撃からです」（ｐ９４）。

以上、「韓国や中国がことあるごとに反日を主張するのは、彼らの建国が日本の影響下で実現されたからなのです」（ｐ２３）という著者の主張は、今後の日本と韓国の関係のみならず中国との関係も厳しい状況が続いていくことを暗示する。「小中華」を任ずる韓国人や「中華意識」のご本尊たる中国人の歴史認識から見て、未開で遅れたと思っていた日本人にやられてしまったことは、大変な屈辱であり、ショックでもあったからだ。それ故韓国と中国が歴史認識問題で日本に対し共闘態勢を組むようになったことは自然でもある。「韓国にとって反日こそ国家の正統性を高め、自国のアイデンティティの基礎になっているために、韓国人を説得することは不可能です」（ｐ２００～２０１）ということになる。

第三に、韓国人と中国人を説得することが不可能な状況であるとするなら、日本としてはこの「歴史戦」にどう対処していくべきか、という点が浮上することになる。著者は次のように語っている。「世界の他の国の人たちには本当のことを知らせなければいけません。ところがアメリカは、戦後世界の秩序を決めたヤルタ・ポツダム体制を維持するためには、韓国や中国の言い分のほうがアメリカにとって都合がいいので、彼らの主張に加担することになります。…そのために歴史をめぐる世界情勢では日本に不利になっているのです。しかし、アメリカ人は理をつくして説明し納得すれば、それまでの態度を改めて行動する人たちなので、日本人はきちんと説明することが非常に重要です。その意味では、日本の外務省の怠慢は問題です。…また、日本の政治家も外交の場で、覇気を持って堂々と主張すべきは主張することが重要なのは言うまでもありません。…韓国や中国とは違って、日本は本当に自由な社会で、誰がどんなことを考えても自由です。しかし、その自由な思考の材料になる歴史の真実だけは提供したい。これこそが私の学者としての使命だと思っています」（ｐ２０１～２０２）。

以上、三点について評者が特に印象深く感じた点を指摘した。著者の歴史研究に基づく主張は多方面にわたっており、韓国や中国に関心のある読者にとって極めて刺激的で、有益であると思われる。読者におかれては、本書を直接手にとられ読んでみられることを評者としては強くお勧めしたい。

最後に、本書についての疑問と言うより希望として、一つだけ指摘しておきたい。本書では唐を駆逐して三国を統一した新羅について殆ど触れられていない。新羅は独自の文化と歴史を正に「紡いだ」と思われるが、どうであろうか。評者の不勉強で著者が他の著書で新羅についてどう言及しているか知らないが、新羅についての著者の見解を知りたいものである。

（のぞえ　しんいち・アジア研究所嘱託研究員）

来料加工廃止後も中国市場・アジア市場を狙う第一電材

藤原　弘

（はじめに）

第一電材の梅澤社長は、34歳で社長に就任し、深圳工場を立ち上げた後は、自ら香港に2年間駐在し、同工場の経営管理の面で直接指揮をとり、その後も月に1回は工場を訪問しており、中国でのビジネス経験が極めて豊富である。本稿は梅澤社長に華南での企業経営の実態について伺った内容をまとめたものである。同社は医療機器、精密測定機、半導体製造装置等に使用されるワイヤーハーネス、ケーブルなどの高品質の部品を多品種少量生産している企業である。同社は2010年に深圳テクノセンターに入居し、そのなかに来料加工の工場と独資の工場を持ち、それぞれの特徴を活かし、中国以外のアジアに展開している日系企業、中国に進出している日系企業に的を絞り来料加工廃止後も積極的に中国市場、その他アジア市場を狙う両面ビジネス作戦を展開しようとしている。

（華南進出の最大の要因は裾野産業の集積）

梅澤社長は中国進出に関しては、当初日本語人材が多く、日本人には住みやすいとされる大連を検討していたが、結果的には電子部品メーカーの集積が進んでいる深圳に決めた。部品メーカー集積の度合いが進んでいるという意味は、当社の場合、中国の部品メーカーの育成が進んでいることを意味するのではなく、日系部品メーカーの集積が進んでいることである。

当社の顧客企業である医療機器、精密測定器等のメーカーは品質に厳しいことから、中国部品メーカーからは部分的に一般部品しか調達できないのが実態だ。しかし、中国の部品産業の未熟さはあくまで第一電材の基準でみたものであり、中国以外のアジアのビジネス最前線をよく見て回っている梅澤社長は、中国の部品メーカーとこれらチャイナプラスワンといわれるアジア各国の部品メーカーを比較すると、中国部品メーカーの技術レベルがかなり高いと評価している。当社の今後の方向性としては、中国部品メーカーの発掘、育成も長期的にはコスト削減の観点から重要な問題となっていることが窺われた。

（高い転職率が最大の問題）

中国進出日系企業が直面する問題としてジェトロのアジア・オセアニア日系企業実態調査（2014年）によると、人材確保が深刻と報告されている。この問題は第一電材においても全く同様であり、従業員の高い転職率に悩まされている。従業員の募集は継続的に行っており、4年ほど前は40―50人の応募があったが、現在はこれほど多数の応募はない。

筆者が10数年以前に訪問したテクノセンターの従業員に関しては、どんぶり一杯の食事で畳一枚程度のベッドで寝起きして毎日13時間以上働く内陸出身の女子工員というイメージが定着していた。しかし、最近は中国人従業員の生活スタイルも大きく変化し、三段ベッドでの寮の生活を好まず、友人と一緒にアパートに住むようになっているとのことである。このアパートは会社が手配し、そのレンタル料も負担し、給与からそれを差し引くシステムをとっているとのことである。さらに食事もテクノセンターの食堂でしなくなり、外部の屋台のようなところで食事をとる傾向が強まっている。そのため、テクノセンターでは入寮希望者が2割前後までに激減したことから寮や食堂を廃止した。

梅澤社長によると、高卒ワーカーの給与は基本給で2030元で、各種手当を入れる3500元程度の給与とのことであるが、テクノセンターの寮や食堂をこれら中国人従業員が利用しないこと

から、今後とも中国人従業員の賃金上昇に向けた企業への圧力は強まる方向にあるといえよう。

（労務管理のポイント）

深圳では中国人従業員の転職率が高いことが大きな問題となっているが、同時に従業員の募集をテクノセンターで行うと、ここ華南地区に進出している日本企業、台湾企業、香港企業等の外国企業で働いた技術力のある技術者、熟練工を採用することができ、生産現場に配置し即戦力として活用できるとのことである。

梅澤社長は、ベトナム、タイと比べると中国の人件費は3割以上高いが、同時に中国の従業員の生産性も3割程度高いとのことであり、中国の労働力の質の高さを強調した。当社の深圳工場は日本人スタッフ2名、中国人従業員16名の計18名の従業員を抱えているが、中国人従業員のほとんどが20代の女性従業員である。女性従業員は当社が採用する前に勤務していた台湾企業、香港企業、日本企業等で技術的ノウハウを蓄積しており、生産ライン、品質管理部門等での精密さを要求される手作業になれているとのことである。これに対して男性従業員は働くことよりもストライキなどを主導する傾向が強く、モノつくりの中核とはなりえないというのが梅澤社長の見方であった。華南はまさに労働力の質からみると女性優位の社会である。

中国の内陸部出身の大卒、高卒、中卒等さまざまな学歴といろんな企業での勤務経験を有する中国人従業員を採用できるというメリットを、深圳のビジネス環境の特徴としてあげられるが、転職率が高いことから、中国人技術者が中国人ワーカーを技術指導するような体制がとれないということも当社のような品質重視の企業にとり大きな問題となっている。ちなみに当社の品質管理に関しては製造部門が生産したものを検査部門が電気検査チェッカーという機械を使用する電気検査と外観検査により、製品の全量検査を徹底しているとのことである。その結果、ここ深圳工場の不良品発生率は山梨工場の0・5％、岩手工場の0・8％に比べてかなり低くなっている。

しかし、中国でのビジネスは中国人にやらせるというのが梅澤社長の方針であり、当社の深圳工場では日本人の工場長と技術者2名が派遣され、中国人従業員の技術指導を行っているほか、当社の岩手の工場と西安市のトレーニングセンターで3か月間中国人従業員に対して日本語研修を実施するとともに、岐阜にある社団法人INC（連合法人支援機構）の研修センターにおいても中国人スタッフを1か月間、日本語及び日本での生活習慣等について研修させており、日本的匠の心」をできるだけ早期に注入することに全力をあげている。

（高まるテクノセンターの重要性）

当社は2010年にテクノセンターに入居したときは日本人スタッフ2名、中国人スタッフ1名で操業を開始した中小企業であった。当然のことながらテクノセンターの経営全般に関わる支援を受けたが、このテクノセンターなかにはIBM(Intelligent Business Management(IBM)という会計事務所が入居しており、会計、経理処理等に関して専門的なサービスを提供してくれる日本での留学経験のあるモンゴル人会計士を活用できることのメリットが大きいそうだ。梅澤社長はテクノセンターのこれまでの支援サービスのなかでも労働争議が発生したときの対応を非常に高く評価しており、「テクノセンターは中小企業の心強い味方である」と述べている。

当社は来料加工廃止後もテクノセンター内にある独資、進料加工を活用して中国、アジア市場での日系企業に対する販売拡大を目指しているが、今後とも海外派遣人材の育成が当社にとっても重要な問題となっているがことから、当社の大卒内定者を入社前に2週間ほどテクノセンターの当社の工場に派遣し、生産現場での中国人従業員との接触を図り、中国ビジネスにおける個人的関係の重要性を認識させるとともに、海外ビジネスでの基本精神として、失敗にもめげず、失敗の「経験を新たなビジネスチャンスに結び付ける気迫を植え付けることを狙っている

当社は既述したように中国、アジアでの販路拡大を狙っていることから今後、海外人材の重要性が急速に高まる状況にある。既に本社には海外営業スタッフとして韓国人スタッフを雇用しているが、今後は中国人を中心にアジア人材の獲得にも努める方針を打ち出している。

（ふじわら　ひろし・アジア企業経営研究会会長）

台湾の葬儀（上）

岡崎幸司

昨年岳父が長逝、筆者は喪主側の一員として葬儀に関わった。このように書くと聞こえはいいが、実際には愚妻の指示通りに動いただけである。したがって、台湾の葬儀について語れるほどの経験も知識もないのであるが、筆者の体験を紹介することで読者諸賢に台湾文化の一端を知っていただければ、と考えている。

本稿は岳父の葬儀に関係して筆者が見聞きしたこと、感じたことを率直に記したものであり、故人や台湾の習慣を批判したり貶める意図は全くないことをお断りしておきたい。また、岳父の葬儀が一般的なものかどうか、筆者には判断しかねるし、不謹慎あるいはグロテスクと感じられる部分や記憶違いがあるかもしれない。ご理解とご寛恕をお願いする次第である。

なお、台湾にも各種の宗教があり、主なものとしては仏教、道教、キリスト教が挙げられる。葬儀は仏教式と道教式が一部混合しているようだが、愚妻の話では、葬儀は仏式にして簡素にすべし、との遺言が残されていたので、これから述べる岳父の葬儀は概ね台湾の仏式に沿って行われたのではないか、と思う。

多種多様な葬儀場と服喪

台湾の葬儀は葬儀場や自宅で行うとは限らない。葬儀を含めた宗教儀式は道路の一部や全部あるいは空き地でテントを張って行うことも多い。道路や空き地の所有者から使用許可を得ているのかどうか、いつも疑問に感じるが、よく見られる光景である。愚考するに、宗教儀式であれば道路や空き地をしばらくの間占拠してもよいし占拠された方も黙認する、という慣習が確立しているのかもしれない。

岳父の場合、葬儀は逝去約三週間後に新北市立板橋殯儀館（葬儀場）にて執り行い、遺骸は同葬儀場の「遺體冷藏室」（霊安室）に安置することになった。告別式までひと月近くも間が空いたのは、葬儀場や火葬場など各方面の都合がなかなか合わなかったためと聞いている。

岳父が鬼籍に入るとすぐに、一連の儀式に必要となる喪服を揃えた。喪服と言っても台湾では色彩面以外に特段の決まりがあるわけではなく、黒色または黒色に近いポロシャツやズボンを急いで購入、着用しただけである。岳父は家族で最高齢男性であったので、故人宅の玄関に喪中を意味する「嚴制」と書いた紙が張り出された。最高齢女性の場合は「慈制」という張り紙をして区別するように、故人の家族内での位置や性別によって喪中の表現が異なる。

最初の拝礼と禁句

告別式前日までに筆者が板橋葬儀場に出向いたのは四回と記憶している。義兄や愚妻に比べるとはるかに少ないので、四回というのは岳父に礼を失しない最低限の回数なのであろう。

第一回目は簡単な拝礼であった。板橋葬儀場には霊安室とは別に告別式当日まで遺影を飾り位牌などを置く「拜飯間」（同葬儀場のホームページによると一六一名分を用意）がある。義母・義兄家族・筆者家族全員でそこへ行き、故人の好物を置いて拝礼した。しばらくすると、親戚も続々と現れ、結構な人数になった。

台湾の葬儀場に来る機会はまずないので、拝飯間を見て回った。遺影としてパスポートの写真を拡大カラーコピーしたものを使っていたり、位牌の前には酒・タバコやお菓子の類はもとより、焼肉弁当が置いてあったりした。

気になったのは、他界者ほぼ全員の位牌の前に美男美女の人形が置かれていることであった。筆者は、当初、この美男美女の人形は夫婦を意味し、あの世で結婚できるように、との願いを込めたもの、と思っていた。後になって、一対の人形は金童・玉女と呼ばれる

西方浄土への案内役で、仏教道教系の葬儀に際して位牌の前に置かれるものであることを知った。

葬儀場では忌み言葉がある。日本の「さようなら」に相当する「再見」が少なくともその一つである。休暇をとり遠方から駆けつけてきた親類が帰宅の途についたとき筆者が「再見」と言ったところ、愚妻から葬儀場では「再見」は禁句だから使うな、と言われた。理由の説明はなかったが、「見」には「会う」の意味があるので、「再見→葬儀場でまた会いましょう→親類縁者からさらに永眠者が出る」という連想で忌み言葉・禁句とされているのだと思われる。

読経と夫婦別姓

第二回目は、故人の冥福を祈るため、数名の僧侶を招いて読経を行う日であった。

その日の夜、体調が優れない義母と小学生の愚息を残し、義兄家族・愚妻そして筆者の計五人で板橋葬儀場近くの一室に出向いた。僧侶団が到着した後、代表から葬儀場に故人の位牌と金童・玉女を取りに行くよう指示された。てっきり、五人全員で取りに行くものと思っていたら、義兄夫人と筆者は同行するに及ばず、と言われた。愚妻の説明によると、義兄夫人と筆者が遠慮を求められたのは、故人と姓が異なるからである。家族であっても異姓を排除する、というのは夫婦別姓制度が持つ冷酷な一面である。夫婦間には越えられない壁があり、潜在的には常に緊張関係にある、と解釈することもできよう。具体的に書くことは差し控えるが、読者諸賢は夫婦別姓制度の背後に見え隠れする思想に気づかれたのではないか、と推察する。

話は少々横道に逸れるが、日本語世代のご老人から、「台湾は日本とは違う。自分の給料や財産は自分で管理しないと配偶者に横取りされるぞ」との忠告をいただいたことがある。幸か不幸か、薄給の筆者には管理すべき給料も財産もない。寝首を掻くには値しないゆえ、ご老人が心配しておられたことは杞憂に終わっているが、戦国時代を彷彿させる助言であった。

読経第一回目

さて、読経と聞いたときは、岳父の冥福を祈りながら神妙な面持ちで僧侶の読経を聴くのだろう、と簡単に考えていた。ところが、これが大違いで、さながら修行のようであった。

読経は午後九時過ぎ開始、少しの休憩をはさんで延々と続き、終わったのは午後十二時をかなり回っていた。僧侶も遺族も原則として起立したまま、遺族は僧侶に合わせて声を出して仏典を読む。が、筆者にはまず読経そのものができなかった。台湾の仏典は繁体字（旧字体）で書かれているため、目が疲れるうえ、内容も理解不能である。加えて中国語読みする。ひらがな・カタカナに相当する注音符号は振ってあるものの、読めないのでどう発音してよいものか、さっぱりわからない。結局、口をパクパクさせる以外に方法はなかったのであるが、これはこれで大変であった。さらに、読経の最中に何回も仏像（故人の位牌）に向かって土下座したり、跪いて背筋を伸ばしたまま読経しなければならない。このような姿勢で読経することは初めてだったので、すぐに背中や腰が痛くなった。岳父には申し訳ないと思いつつも、時間が速く過ぎることを願うばかりであった。

読経を終えた後、位牌と金童・玉女を抱えた義兄を先頭に五人全員葬儀場へ戻った。午前零時を相当過ぎていたが、多くの人影が見られた。深夜の葬儀場に漂う静けさの中から話し声が聞こえ、幻想的にして神秘的な雰囲気であった。位牌と金童・玉女を拝飯間に戻した後は「紙銭」と呼ばれる、故人が来世で使う紙幣を数枚ずつ「金爐」という専用の焼却炉で燃やす。岳父については遺言の趣旨に鑑み、少量の紙銭を燃やすにとどめたが、前にいた遺族は「地獄の沙汰も金次第」「あの世も万事金」（？）とばかりに驚くほど大量の紙銭を燃やしていた。お金に対する執着心に圧倒されるとともに、焼却炉の熱さに耐えつつひたすら紙銭を燃やし続ける忍耐力に感心してしまった。この点、日本は三途の川の渡し賃として紙で書いた六文銭を棺に入れるくらいであり、実に淡白である。

次号に続く

（おかざき　こうじ・中華大学）

アジアの窓

権力を可視化する儀式

九月三日に北京で行われた大規模な軍事パレードは、「抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利七〇周年」という表向きのお題目よりも習近平主席の威信をかけた一大行事だった。

中国の軍事パレードは一九四九年の建国以来今回で一五回目になる。建国から一〇年間は毎年国慶節（一〇月一日）に行われていた。その後は大躍進や文化大革命で行われず、八四年の建国三十五周年に二五年ぶりで行われた。毛沢東亡き後、権力を掌握した鄧小平がそれを誇示するものだった。その後九九年の建国五〇周年、二〇〇九年の同六〇周年に江沢民、胡錦濤がそれぞれ行っており、こうした前例から言えば、習近平は一九年のはずである。

それを四年前倒しで実施する口実として用いられたのが抗日戦争勝利七〇周年であり、大義を広めるために反ファシズムも加わった。そのためには国民政府の主導で行われた同戦争も「中華民族の成果」と独自の歴史観に取って変えられた。記念映画『カイロ宣言』のポスターでは、蒋介石のはずが毛沢東にすり替わっているのは、さすがに物議をかもした。

そこまでして軍事パレードを急いだのはなぜなのか。就任後わずか二年余りで軍を掌握し権力基盤を強固にした自信もあろうが、権力を可視化する儀式が必要だったのだろう。「皇帝即位式」に擬えられる所以である。

パレード実施にあたり、八月後半から交通規制に加え、周辺各省の工場の操業や建設工事もストップ、「パレード・ブルー」という青空が演出された。青空だけなら良い。市内中心部の建物は全て立ち入り禁止。筆者がパレードから二週間以上前に泊まる予定だった王府井のホテルは突如「通達により」と予約を取り消された。出前や宅配もストップし、病院まで休診だ。警備には警官六万五千人、民間の治安ボランティア八十五万人が動員された。街中ピリピリとした空気が張り詰め、北京空港の国内線出発は手荷物検査で四十五分待ち、という厳戒態勢。一体、この祝典に誰が水を差すことを恐れているのか分からない。

このように周到に用意された儀式だったが、その割に空回りした感が否めない。アジアインフラ投資銀行（ＡＩＩＢ）では予想を大きく上回る五七カ国が堰を切ったように創設メンバーに加わったが、今回天安門の楼上に並んだ二二人の国家元首の顔ぶれはちょっと寂しい。景気は息切れ気味だし、天津の爆発事故も余計だった。休む間もなく次は米国での儀式だ。

それにしても、国慶節から一か月前倒ししたら炎天下で大変でしたね。お疲れ様でした。

（遊川　和郎・アジア研究所教授）

✽ 研究所だより ✽

アジア研究所では現在8つの研究プロジェクトを実施しています。それらをご紹介いたします。

＜今年度終了＞

・「アジアのグローバル化と日本企業のアジア投資」
（代表者　石川　幸一）

・「新段階を迎えた東アジアⅣ」
（代表者　遊川　和郎）

・「北東アジアの経済・社会変容と日本Ⅲ」
（代表者　西澤　正樹）

・「東アジア地域における
環境エネルギー政策共同体の可能性に関する考察」
（代表者　范　云涛）

＜来年度終了＞

・「次期政権下での朝鮮半島情勢の展望」
（代表者　奥田　聡）

・「経済共同体創設後のＡＳＥＡＮの課題」
（代表者　石川　幸一）

・「アジア地域における環境問題
―現状と課題、今後の展望―」
（代表者　田部井　圭子）

・「サービスの商品化がもたらす日比関係の
変容に関する学際的分析」
（代表者　小張　順弘）

これらプロジェクトの成果は順次プロジェクト報告書『アジア研究シリーズ』としてまとめられます。ご期待ください。